

「荒神山古墳」が国の史跡指定の 答申を受けました

11月19日(金)、「荒神山古墳」が国の史跡指定の答申を受けました。彦根市では「彦根城跡」「彦根藩主井伊家墓所」に次いで3件目の国史跡であり、彦根南西部地域では初めての指定となります。今後、文化庁から正式な告示がある予定です。

荒神山古墳の重要性を、広く市民の皆さんに知っていただくとともに、彦根の文化財として大切に守っていきましよう。

問い合わせ先 関教育委員会文化財課
☎26-5833番、FAX26-5899番、Eメール: bunkaza@mx.hikone.ed.jp



▲荒神山古墳の位置(白い丸で囲んでいる部分)

荒神山古墳は、彦根市の南西部、びわ湖岸に近い湖東平野の独立丘である荒神山の山頂から、北へ約150m下った尾根の頂部に位置しています。これまで関教育委員会文化財課では4度にわたる発掘調査を実施してきました。その結果、今から約1,600年以上前の古墳時代前期末(4世紀末)に築造された前方後円墳(※)であることがわかりました。全長は124mで、安土瓢箪山古墳に次いで県下2番目の規模を誇ります。この規模は、湖東平野においても突出しており、この地域に大きな力を及ぼした人物の古墳と考えられます。調査では3段に築かれた墳丘を備え、埴輪を巡らせて葺石で覆うという特徴も確認しました。こうした特徴は、大和(奈良県)中枢部で築造された古墳と同じ傾向を示しており、大和とも深いつながりを持った古墳であると推定されます。

また、平野部よりもびわ湖側に眺望が開けている点が目立ちます。この時期、近江に進出した大和勢力は、在地の勢力と連合し制圧しながら北陸や東海地方へと勢力を広げ、さらに朝鮮半島と直接交流するルートを確保するため、びわ湖の湖上交通の掌握に力を注いでいました。そのためびわ湖の湖上権益に有力な統治者を任命し、湖

荒神山古墳国指定記念講演会

4度にわたる発掘調査の紹介と、荒神山古墳の歴史的重要性に迫ります。

日時 平成23年1月29日(土) 13:30~16:30

会場 南地区公民館 大会議室(甘呂町)

- 内容
- ①「荒神山古墳の発掘調査について」
林昭男(関教育委員会文化財課)
 - ②「荒神山古墳と北近畿」
細川修平さん(関教育委員会文化財保護課)
 - ③「近江の古墳と古代氏族」
～荒神山古墳の被葬者をめぐって～
大橋信弥さん(県立安土城考古博物館)

参加費 100円(資料代)

申込方法

電話か、ファクス、関教育委員会ホームページから申し込むことができます。ファクス・ホームページからの申し込みの場合は、①住所 ②電話番号 ③参加者の氏名を書いてください。

問い合わせ先 関教育委員会文化財課 ☎26-5833、FAX26-5899、関教育委員会ホームページ: <http://www.city.hikone.shiga.jp/edu/>

※前方後円墳: 日本における古墳の1形式で3世紀中ごろから7世紀初めごろにかけて築造されました。平面が円形と方形の墳丘を組み合わせた形状は、日本特有のものです。

報告書頒布のご案内

国史跡荒神山古墳の発掘調査報告書『彦根市文化財調査報告書 第2集「荒神山古墳」を1部2,000円にて頒布しています。申し込みは、関教育委員会文化財課までご連絡ください。

連載企画 「わたしの町の戦国 第8回」

佐和山とその時代③ 織田信長の近江制圧

佐和山城主丹羽長秀

元龜2年(1571)2月、佐和山籠城戦に勝利した織田信長は、籠城戦を主導した重臣丹羽長秀をそのまま佐和山城代として入れ置きました。

丹羽長秀は天文4年(1535)、愛知郡児玉村(現在の名古屋市区)に生まれました。天文19年(1550)、15歳で信長に仕え、信長の兄信広の娘を妻としています。丹羽長秀は、信長が尾張一國を治めていた時代からの重臣でした。

城代として佐和山に入った長秀は、間もなく近辺の領有を許されて5万石



▲丹羽長秀和像(福島県大隣寺所蔵)

を所領する城主となり、近隣の土豪を配下に加えるなど領内統治を精力的に行っています。

一方、織田信長も近江の制圧に力を注ぎます。元龜4年(1573)8月には小谷城を攻め、浅井久政・長政父子を自決に追い込んでいます。こうして、近江に軍馬を進めてから5年の歳月をかけて、ようやく信長は近江の実質的な制圧に成功したのです。北の横山城(長浜市)、東の佐和山城、南の坂本城(大津市)が近江の街道をしっかりと見据えていました。

信長の大船建造

もともと、信長が制圧したのは陸路だけではありませんでした。近江には、中央を大きく占めるびわ湖があります。元龜4年5月、信長は佐和山城に立ち寄り、丹羽長秀に命じて犬上山中の材木を佐和山山麓の松原に運ばせ、大船の建造に着手しています。大船は長さ30間(約54m)、幅7間(約13m)、櫓100挺を備えた巨船でした。この船は7月に完成すると、さっそく信長に抵抗して挙兵した足利義昭が籠る槇島城(京都府宇治市)攻めに利用され、大軍を乗せて松原から一気に坂本へ移動し

ています。こうして信長は、陸路に加えてびわ湖の水運も確保し、それを有効に利用しました。

安土城の築城

天正4年(1576)1月、信長は水陸兼備の本格的な城の築城を安土において開始します。築城の総奉行には、佐和山城主丹羽長秀が当たりました。国内の諸将も安土に集まって築城に参画しました。かくして天正7年、5層7重と伝える天守(天主)を備えた安土城が完成しました。それは、新しい権力者の出現にふさわしい壮大な城でした。



土塁跡

内堀跡

▲佐和山城跡の大手(鳥居本側に良好に残る内堀跡(右)と土塁跡(左))

問い合わせ先 関教育委員会文化財課

☎26-5833番、FAX26-5899番、Eメール: bunkaza@mx.hikone.ed.jp

mx.hikone.ed.jp